

## パフォーマンス研究からツーリズムを観る

高橋 雄一郎

### 1. はじめに

ここ数年、日本の大学における観光学部、観光学科の新設ラッシュは、「観光学」が独立した専門領域であるかのような印象を与えているが、私は必ずしもそうではないと考えている。観光（ツーリズム）は、今や私たちの日常生活の一部としてすっかり溶け込んでいて、特別な現象や行動の様式として抜き出して研究の対象とするよりは、より広い「移動」という枠組みの中で、学際的に議論した方が、現代の世界を考察する上でプラスになるのではないか。たとえば、ジョン・アーリとクリス・ロージェクは、共編著、*Touring Cultures: Transformations of Travel and Theory* (1997) で、「ツーリズム」という領域設定そのものを疑問に附し、ツーリズムを、人々、文化、モノの移動という観点から、より広い社会科学の考察に含めることを提唱する(1,11)<sup>1)</sup>。ここには、国境を越えて移動する移民や、ツーリストと並んで、文化もまた国境を越えて移動している、という考えがある<sup>2)</sup>。また山下晋司は、『観光人類学の挑戦』(2009)で『「観光」と『移住』というしばしば別々に考えられる現象が、じつは相互に関連しつつ、移動する人びとの世界を形成する(21)』と主張する。

本論は、社会学者としての訓練を受けていない私が、「観光社会学」に何がしかの貢献をしようと試みた結果であり、ツーリズム（観光）を移動の一形態と位置づけた上で、「パフォーマンス研究」からツーリズムにアクセス

する。パフォーマンス研究は、文化人類学、演劇研究、フェミニズム、クイア・スタディーズ、カルチュラル・スタディーズなどが交錯する学際的な研究姿勢で知られている。具体的には、最初にパフォーマンス研究の概観を示した上で、パフォーマンスによって構築されるデスティネーション、ツーリスト・パフォーマンスとリミナリティの順に論を進める。

## 2. パフォーマンス研究

パフォーマンス研究は、まだ歴史の浅い研究分野である。大学の組織としては、1980年に大学院演劇科をパフォーマンス研究科に改組したニューヨーク大学がはじまりであり、演劇研究と文化人類学が母体となっている。パフォーマンス研究の世界規模の学会が組織されたのは、1990年代の後半になってからだ。パフォーマンスという言葉はさまざまな文脈で用いられるが、パフォーマンス研究の研究対象は、大きく、舞台芸術としてのパフォーマンス、日常生活のパフォーマンス、文化的パフォーマンスの3領域に分けることが出来る。しかし、これらの領域は互いに重なり合っていて、明確に区分することはできない。

英語圏では、パフォーマンスという言葉は、演劇をはじめとする舞台芸術を指して用いられることが多い。英語のパフォーミング・アーツ (performing arts) という単語は、映画、演劇、オペラやバレエ、ミュージカル、ロック・コンサートからサーカスや大道芸まで、伝統的や芸術的とされるものから、大衆的とされるものまで、舞台芸術全般を指す。パフォーマンス研究は、その出発点の一つが演劇研究にあり、「パフォーマンス＝演技」というレンズを通して、社会や文化を分析する、という方向を歩んできた。

「日常生活のパフォーマンス」には、毎日の生活の中で、私たち一人一人が、パフォーマンスを繰り返しながら生きているという発想がある。たとえば大学で授業をしている時、顧客と打合せをしている時、恋人と食事をしている時、私たちの服装、言葉遣い、表情、立ち居振る舞いは、それぞれに異なる。これを、大学向け、仕事向け、デート向けと、TPOに応じて仮面

を着けかえるように演じるパフォーマンスと考えることができる。社会学者のアーヴィング・ゴフマンが、1959年の著書*The Presentation of Self in Everyday Life*で、パフォーマンスを「特定の観察者の一団を前に留まることにより有徴化された時間内におこなわれる個人の行為の全てで、観察者になんらかの影響を及ぼすもの(22)」と定義したことは、コミュニケーションや行動の理論としてのパフォーマンス研究のはじまりとってよい。

私たちの社会生活を構成しているのは、このような個人によるパフォーマンスと、文化人類学で「文化的パフォーマンス」と呼ばれている、複数の参加者によって集成的におこなわれるパフォーマンスの組み合わせである。パフォーマンス研究では、文化的パフォーマンスを、ある文化に特徴的なパフォーマンスという意味だけではなく、文化の構成要素という意味で使っている。文化的パフォーマンスには、宗教儀礼から社会的なイベントまで、さまざまなものが含まれる。民主・共和両党の予備選にはじまり、本選挙を経て就任式まで、一年以上をかけておこなわれる、アメリカ合州国の大統領選挙は、規模の大きな文化的パフォーマンスといえる。また、小は地域の郷土博物館から大は万博に至るさまざまな展示、メディアや広告を媒介とした表象、さらに規模の大小こそさまざまだが、小学校の運動会から甲子園の高校野球を経て、ワールドカップやオリンピックに至るスポーツ・イベントも文化的パフォーマンスである。本論のテーマであるツーリズムも、文化的パフォーマンスとして捉えることができる。

ここまで話題にしてきたパフォーマンスは、舞台芸術にしても、個人による日常生活のパフォーマンスにしても、また、集合的な文化的パフォーマンスにしても、身体行為としての性格が強い。しかし、次節で見ると、展示品(モノ)やデスティネーション(場所)もパフォーマンスによる働きかけをしている。パフォーマンス研究者のリチャード・シェクナーは、地図を以下のようにパフォーマンスとして分析している(41)。

球形の地球を、平面上に表すには当然、何らかの工夫が必要になる。学校の教科書などを含め、現在、私たちの目に触れることが多い地図は、16世紀フランドルの地理学者、メルカトルによって考案されたもので、メルカト

ル図法と呼ばれている。彼の製図法は南北の軸線が磁石の指標と一致するので、航海中の方角測定に便利のため普及した。しかし、この地図があまりに「当たり前」になってしまったために、私たちは普段、この地図が大航海時代の支配者であった、ヨーロッパの王族や軍人、探検家や商人たちの欲望を充足する機能を果たしてきたことを忘れがちである。彼らは、あくなき利潤の追求、すなわち、ヨーロッパ文明の光が及ばない地域を制圧し、搾取し、植民地化するために、この地図を使って航海を繰り返していた。加えて、メルカトル図法では、赤道からの緯度の高さに比例して面積が増大するため、北半球が南半球に較べて不釣り合いに肥大して表示される。たとえば、ヨーロッパは南アメリカ全体より大きいし、ノルウェーとスウェーデンを合わせると、インドより面積が大きくなる。メルカトル図法は、北側先進地域のパワーを、面積の広がりとして地図上で誇示し、見る者の記憶に埋め込む装置であり、現実を、西欧中心的なイデオロギーのレンズを通して構築するパフォーマンスであった。

このように考えると、身体行為に限らず、私たちが世界をどのように認識し、どのように表象するかという、より概念的な営みもまた、パフォーマンスとして考えることができる。現実がパフォーマンスされるものであり、パフォーマンスによって構築される、といっても過言ではない。2003年に『パフォーマンス研究』というリーダーを編集したエリン・ストリフは、その序文で、「パフォーマンスについて考えることは、文化がパフォーマンスなしには成立しないという前提のもとに、自分たちが自らをいかに表象し、また、日常生活において、それらの表象をいかに繰り返しているかを研究することだ(1)」と述べている。

現実がパフォーマンスされる、または現実がパフォーマンスによって構築される、という考え方は、パフォーマンスとアイデンティティの関係を、パフォーマンス研究の課題として前景化する。「自分が誰であり、どこに属しているのか」というアイデンティティの感覚は、個人に本質的に備わっているものではない。アイデンティティが社会化の過程において、家庭、学校、地域共同体などを動員した国家的なイデオロギー装置の呼び掛けによって成型され

るとする、ルイ・アルチュセールの主張は、文化的パフォーマンスの概念を援用することで、より説得力を増す。たとえば、国単位で参加するスポーツ・イベント、特にオリンピックは、メダルの授与と国歌の演奏・国旗の掲揚がセットになっていて、国民アイデンティティを確認し、ナショナリズムを高揚させるパフォーマンスとして機能する。

「国民アイデンティティ」と並んで、パフォーマンスによって構築されるアイデンティティの典型にジェンダーがある。生まれたての赤ん坊には、自分が女である、男であるという意識はない。しかし、生誕の瞬間に、医師や助産師によって「男」あるいは「女」と告知されるや否や、赤ん坊の意識の外側の社会では、赤ん坊を「一人前の男」、あるいは「一人前の女」にするためのパフォーマンスがはじまる。女の子は女の子らしい、男の子は男の子らしい名前を与えられ、戸籍に登録されることで、法的な認知を受ける。男の子はブルーのパジャマを、女の子はピンクのパジャマを着せられ、大きくなると片方にはミニチュア自動車や野球道具、また片方には人形やままごと道具といった、ジェンダーに固有のおもちゃがプレゼントされる。こうした外部によるパフォーマンスは、子供の成長に従って内面化され、女の子と男の子は、それぞれに「愛らしく女らしい」、あるいは「逞しく男らしい」パフォーマンスをするようになる。『第二の性』(1949)で、「女は女に産まれるのではない、女になるのだ」と言ったシモーヌ・ド・ボーヴォワールから40年、フェミニズムの理論家ジュディス・バトラーは、『ジェンダー・トラブル』(1990)において、セックスやジェンダーにまつわるアイデンティティが、規範化された行為の反復によってパフォーマンス的に構築されると主張した。

パフォーマンスから派生した概念の多くが、さまざまな研究領域で応用されるようになった背景には、ポスト構造主義によって、アイデンティティが唯一不変なものでなく、歴史的、社会的に構築されるもの、と捉えられるようになった思想史的な転換がある。国民性やジェンダーのように、何気なく「自然」で「当たり前」と考えられがちであったアイデンティティの拠り所が、文化的、歴史的に変化するものであり、そこには往々にして差別や排除のメカニズムが組み込まれていることを明らかにしていくことは、パフォーマンス

ス研究の大きな仕事である。支配の構造に介入し、規範的秩序を攪乱する可能性が、そこから生まれる。

### 3. パフォーマンスにより構築されるデスティネーション

近年、目を引くのは、パフォーマンスと場所の関係を論じる、社会学者や地理学者の主張である。アーリは、『社会を越える社会学』の日本語版序文で、「場所という単一の範疇は、すでに確立しているというよりはむしろ、主催者、ゲスト、建物、モノ、機械が特定の時刻に特定の場所で何らかのパフォーマンスをおこなうためにたまたま寄り集まるというような複雑なネットワークのなかで、その意味が示されることになる。(xiii-xiv)」と述べ、場所がアプリアリに存在するものではなく、パフォーマンスをおこなう人々（主催者、ゲスト）と、背景や舞台装置を提供する環境（建物、モノ、機械）の関係性の中で立ち現われる点を指摘している。*Tourism: Between Place and Performance*では、文化地理学の視点から、編著者のサイモン・コールマンとマイク・クラングは、より端的に、「場所を固定された存在ではなく、むしろ流動的でパフォーマンスを通じて作り出されるものとして捉える(1)べきだと主張する。

場所は、パフォーマンスの媒介を受けることで観光地（デスティネーション）へと変質する。場所そのものに魅力が内在しているのではなく、「これは見るに値する」という記号や枠組みが付与されることで、デスティネーションが創出される。タージ・マハールもアンコールワットも、巨大な建造物であるというだけでは、わざわざ人は遠くからやっては来なかった。他では見ることのできないという希少性、卓越した美、歴史的重要性を説き、高額な費用と多くの困難を伴う旅をしてまでも行ってみたいと思わせた、植民地時代のトラベル・ライターたちの筆致は、東洋を魅惑的なものに脚色するパフォーマンスであり、支配者側が作る「オリエンタリズム」言説の一部になった。一見無邪気に見える「ツーリストのまなざし」の背後には、政治的な意図が隠されていることも多い。マッキャネルは1992年の*Empty Meeting*

*Grounds*で、ツーリズムを「歴史、自然、伝統をイデオロギ的にフレーム化する(枠組みに入れる)こと(1)」と定義している。

民俗学者でパフォーマンス研究者のバーバラ・キルシェンブラット・ギンブレットは、「ツーリズムは現実の世界を、世界のミュージアムとして演出する(7)」と述べる。ミュージアムは収集品の展示によって、一つの建物の内部に、世界の諸文化をエッセンスとして作り出す。マッキヤネルが「演出されたオーセンティシティ」の議論で明らかにしたように(1973, 1976)、あるモノをミュージアムという特別な空間に配し、ガラスケースに入れて展示することは、そのモノにアウラを与え、価値のあるものとして見せることである。たとえば、アポロ宇宙船が持ち帰った月の石は、もし、何気なく私たちの周囲に置かれていたら、おそらく路傍の石と区別することは出来ないであろう。盗難を防止し、保存状態を一定に保つために空調のついた特殊な展示ケースに収められ、解説パネルをつけられてはじめて、月の石は「まなざしの対象」としての価値を獲得する<sup>3)</sup>。

現実の世界は、ミュージアムのような凝集された空間ではない。ツーリストが旅の目的地とするデスティネーションも、地理上の点と点として、距離を置いて存在する。だから、ある場所がデスティネーションとして機能するためには、演出、あるいはパフォーマンスが必要になる。まず、デスティネーションは他のデスティネーションと結びつけられる必要がある。ドイツのロマンティック街道などがよい例であるが、点と点を「旅程」や「コース」に組み入れることで線にすることは、ツーリズム成立のための大切なパフォーマンスとして考えられる。以下、パフォーマンスにより構築されるデスティネーションを、ホテル、リゾート、オリンピック、テーマパークの順に考察する。

1962年に出版された『幻影の時代』(原題は*The Image*)で、ダニエル・ブーアスティンは、ツーリズムが、メディアによって増殖される「疑似イヴェント」の一つであると主張した。近代化された設備と快適なサービスを提供するホテルは、疑似イヴェントとしてのツーリズムには欠かせない。ブーアスティンは、米国資本で世界中に展開するヒルトン・ホテルを、「窓から見える景

色を別にすれば、滞在客が自分がどこにいるかを知ることができない。自分が外国にきているのではないという安心した気分になれる(110) 場所として説明している。ホテルは、ツーリストが滞在する泡＝バブルのような空間である。バブルの内側は透明な膜で外界と遮断され、ツーリストにとって自国にいるのと同じような環境が保たれている。安全で、自国語が通じ、国際電話を使っていつでも自宅と通話ができる。加えて、パッケージ化されたツアーでは、ツーリストはバスというもう一つの遮断されたバブル空間を使って、一つのホテルからもう一つのホテルへと移動する。自由時間に散歩を試みて、ごく一時的にホテルの外へ出かけることはあっても、絵葉書を買ったりするだけで、怖いことがあれば、すぐにホテルへと逃げ帰ることができる。こうしたバブル空間を支えているのが、玄関のドア係から、ベル・ポーター、フロント、客室係、ルームサービス、コンシェルジェなど、制服を着たホテルの従業員である。彼女たち／彼らは、それぞれに割り振られた役割をパフォーマンスすることで、ツーリスト・バブルのメンテナンスをしてくれる。

リゾートの特徴は敷地面積がホテルより大きく、市街からは一般に離れている点だ。リゾートはより大型のツーリスト・バブルである。リゾートにはレストランやバー、プールやスパ、ショッピングアーケードなどが完備されていて、外に出なくても快適な休暇が過ごせるように設計されている。加えて地中海クラブ型の「オール・インクルーシヴ」なリゾートでは、食事と飲み物が料金に含まれているので、一度パッケージを購入してしまうと、リゾート滞在中は支払いに煩わされることはない、但し、外の世界と隔絶されているために、現地の生活に触れる機会がない。この傾向は第三世界のリゾートでより顕著になる。現地の労働者はベッドメイキングや皿洗いなどの裏方であり、ゲストが接するのは、英語やフランス語、あるいは日本語を話す、地中海クラブではGO<sup>4)</sup>と呼ばれる北側出身の労働者であることも多い<sup>5)</sup>。夕食時に演じられる、ツーリストのための演出が施されたショー＝パフォーマンスが唯一、現地の文化との接触だったりする。

オリンピックは、場所がパフォーマンスをする人々(主催者、選手、観客)と、背景や舞台装置を提供する環境(競技場、聖火台、ホテルなどの受入れ



施設)の関係性の中で立ち現われる、という主張について、最良の例を提供している。オリンピックの開催地は、リゾートよりもさらにずっと広く、空間的同質性はそれほど高くない。それでも、立候補は一都市に限定されており、使用される競技場や選手村などはコンパクトに配置されていて、まとまりのある祝祭空間を演出している。しかし、オリンピックという場所は、空間的というよりも時間的に構築されている。オリンピックは、開会式と閉会式という、二つの儀礼的なパフォーマンスに挟まれた、二週間ほどの期間中、メイン・スタジアムの聖火台に聖火が灯されている間だけ存在する想像上の場所である。オリンピックは、特定の都市に人々（オリンピック委員会関係者、選手、役員、観客、そして運営を支える多くのボランティア）が集まることで成立するが、この想像上の場所は、オリンピックの公式な言説によれば、開会宣言と共に誕生し、閉会宣言と共に消滅する。この間、競技と付随するイベントをはじめとする、さまざまなパフォーマンスによって、開催都市は華やかなオリンピックの祝祭的雰囲気満たされる。

オリンピックは4年に1度しか巡ってこないが、同じような祝祭空間が恒久的に存在するのが、ディズニーランドに代表されるテーマパークである。オリンピックが「聖火が灯されている」間だけ、時間的に遮断されているように、テーマパークは空間的に外の世界から遮断されている。遮断は、ホテルやリゾートより、一層徹底している。ディズニーランドには、外部との境をなす出入口は一つしかなく、敷地は、その上を西部開拓時代を思わせる鉄道が走る土手で円く囲まれているため、園内では外の景色が見えない同質な空間が演出（＝パフォーマンス）される。一度入場すれば、そこは「魔法の王国（マジック・キングダム）」である。ディズニーランドでは、キャストと呼ばれる従業員が、アトラクション、レストラン、ショップなど、パフォーマンスによって構築された空間で「パフォーマンス」することで、想像上の場所が作られている。

#### 4. ツーリスト・パフォーマンスとリミナリティ

人文社会学の領域でツーリズムが本格的な研究対象となる1970年代後半、社会学者のディーン・マッキヤネルは、1976年に出版され、ツーリズム研究の古典となった*The Tourist*で、ツーリズムを、ポスト産業化社会に疎外感を覚える人々によるオーセンティシティの探求と捉えた。ツーリズムは一般に日常からの脱却であり、煩雑な日々の生業からの一時的な解放として、オーセンティックな自然や文化に触れることで癒しを求める行為、つまり世俗社会における巡礼的な行為と考えられるようになった。文化人類学者のネルソン・グレーバーンは、翌1977年に出版され、同じように古典となったヴァレーン・スミス編、*Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*の第一章で、エミール・デュルケムやアーノルト・ファン・ヘネップ、エドモンド・リーチなどの先人を引いて、ツーリズムを「聖なる旅」と位置づけた。グレーバーンによれば、ツーリズムは人生の流れの中で、仕事と仕事の間に定期的に祝われる、聖なる日＝ホリデイ (holy day=holiday) なのである。

また、人生を誕生から死に向かう直線的な階梯と考えれば、休暇と旅によって構成されるツーリズムを、一種の通過儀礼とみなすこともできるだろう。20世紀初頭にファン・ヘネップによって提唱され、その後、1960年代から80年代にかけてヴィクター・ターナーによって展開された通過儀礼のモデルを当てはめると、ツーリズムの時間と空間は、休暇を取って旅に出る、日常で世俗な時空からの分離と、旅から戻り仕事が再開される、同じく日常で世俗な時空への統合に挟まれた、「リミナリル (境界的、過渡的)」な領域に出現する (Urry 2002, 10-11、須藤 49-51 を参照)。「リミナリティ」はラテン語で敷居を示す「リーメン」から派生した単語である。通過儀礼に於いて、人はいわば敷居を跨ぐことによって、人生のより高位な段階に移行する。敷居は儀礼に於ける中間状態のメタファーであり、成年式を例にとれば、儀礼の終了によって、人は一人前の大人として認知されるが、儀礼が執り行われている間は、子供でも大人でもない、どっちつかずの状態にある。

ターナーは、通過儀礼を受ける者は、リミナリティの領域で、「空っぽ」

な、つまり白紙（タブラ・ラーサ）な状態に戻され、新しい社会的地位が刻印されるのを待つと考えた(1969, 103)。ツーリストもまた、旅にある間は、仕事のストレスや人間関係のしがらみから解き放たれて、子供のような邪気のない状態に戻る、と考えることもできるだろう。このような中間状態で、秩序は一時的に停止し、価値の逆転が起きたり、時には度の過ぎた放縦が許されることもある。リミナルな時空はまた、通過儀礼だけではなく、季節のサイクルとともに廻ってくるカーニヴァルのような祝祭にも顕著である。カーニヴァル（謝肉祭）は、キリストが悪魔に試された40日間の試練を記念して、復活祭前の日曜日を除く40日間を、四旬節と呼ばれる、祈りと禁欲の期間としたキリスト教の慣習に基づく、主にカトリック教会圏の祝祭である。四旬節の最初の日を「灰の水曜日」と呼び、この日、司祭は信者の額に灰で十字架の徴を描く。人間が塵から生まれ塵に還る存在であることを思い起こし、質素で敬虔な日々を送るためだ。カーニヴァルは、この水曜日の前の数日間を通しておこなわれ、禁欲生活に入る前の、許された欲望のガス抜き期間として、にぎやかな祭りが繰り広げられる。カーニヴァルが字義的には「肉食の中止」を意味し、カーニヴァル最後の火曜日をフランス語で「マルディ・グラ（太った火曜日）」と呼ぶのも興味深い。

カーニヴァルに於ける価値の逆転は毎年必ず、「灰の水曜日」と共に終了し、秩序の回復と共に人々は日々の生活に立ち帰る。「日常」→「非日常」→「日常」のパターンが繰り返される。ツーリズムに話を戻すと、語源的には円を描くこと、周遊することを意味する「ツアー」から派生した、ツーリズムという単語は、「ホーム」から「アウェイ」、そして「ホーム」へと帰る円環的な運動を指す。仕事や日常生活の場である「ホーム」を一時離れ、遊びと休息の空間にしばし滞在した後に家に戻るツーリズムは、通過儀礼やカーニヴァルと同じ「俗」→「聖」→「俗」、あるいは「日常」→「非日常」→「日常」のパターンを繰り返す。

ツーリズムを通過儀礼と較べることができるのは、行為の主体であるツーリストが、旅の体験を通じて何らかの発見をし、人間的な成長を遂げると考えられるからである。ツーリストは、自分が親しんだ家や生活環境を後にし、

距離的に離れた他者の文化圏に、たとえ短い期間であっても身を置くことになる。言語や習慣の違う土地への旅は、普段、当たり前だと考えている基準が必ずしも通用しない、リミニリティの領域への移動である。通過儀礼的な文脈では、リミナルな状態にあってはじめて、人は、ルーティーン化された日常では気付かない真実に直面する。ツーリズムの文脈では、人は、自文化から他文化へ、「ホーム」から「アウェイ」の領域に移動することではじめて、自文化について、自己の存在と帰属について、日常では作動されることない省察性（リフレクシヴィティ）を働かせる。ツーリズムがアイデンティティの確認行為ともなる所以である。

しかし、一方で今日、休暇を取って旅をすることはより頻繁におこなわれ、私たちの生活にすっかり溶け込んでいる。旅行することで人生のより高位な段階に移行するなど言うのは、何だか大仰な感じがする。旅が人生に特別な意味を与える、という感覚は希薄化している。また、「ホーム」と「アウェイ」の違いもそれほど明瞭ではなくなり、異種混淆的な空間が、世界中で、都市部を中心に増殖している。「アウェイ」は海外に出なければ目にしたり、触れたりすることができない存在ではなくなった。さまざまな民族が交錯する、六本木や大久保のような町を歩いていると、一瞬、自分がどこの国にいるのか分からないような、不思議で、眩暈にも似た感覚に襲われることがある。大きなターミナル駅にある、フードコートのような場所では、メキシコのタコス、ヴェトナムのフォー、トルコのケバブなど、かつては飛行機に乗って「現地」に行かなければ口にできなかった食べ物を味わうことができる。エスニック・フードのポピュラリティには目を瞠らされる。私の勤務する埼玉の大学の近所にも、シーク人の経営する、パンジャブ料理店ができた。「アウェイ」は「ホーム」の内部にあり、海外は日本の中に点在する。また反対に日本も海外に多く展開している。

「ホーム」と「アウェイ」の違いが不明瞭なのと同じように、「日常」と「非日常」の区別や、仕事と遊びの領域が曖昧になったのも現代に特徴的である。「ツーリズムをパフォーマンスする、ツーリズムを演出する」(2001)と題された論文<sup>6)</sup>で、ティム・エデンソーは、日常と、ツーリズムの非日常の空間が、「鱗

状／瓦状」に重なり合うイメージを提起している(79)。また、エイドリアン・フランクリンも、著書『ツーリズム』(2003)で、「ツーリズムはもはや日常の生活圏から遠いところで起きるのではなく、日常に浸透している(2)」、「現代の生活の特徴づける流動性と移動、そしてスペクタクルや余暇への志向は、生活をツーリズムや旅行にとても類似したものになっている(80)」と主張する。

ターナーは、こうした変化を、「リミナル」から「リミノイド」へ、という表現で説明する(1974, 15, 1982)。ターナーは、工業化以降の社会で発達した余暇を位置づけるために、リミナルに類似しているが、リミナルではない、という意味で、「リミノイド」という造語を作った。一般に「伝統的」と考えられる社会では、リミナルな状態を伴う休暇は、カーニヴァルや寺社の祭礼など、宗教的なカレンダーや季節のサイクルに従って廻ってくるものであり、一定の決められた時間に限って出現する。リミナリティ(境界性、過渡性)は、人が自由気ままに作り出すことが許されないものであった。一方、「リミノイド」な状態は、アフター・ファイヴにも、週末にも、宗教的権威や社会的慣習の外側で、人が自由に作り出すことができる。IT化が進み、フレックスタイトのような制度が導入されれば、オフィスのメンバー全員が、月曜日から金曜日まで、同じ時間に出勤して同じ時間に退社するような労働形態は不要になる。余暇は自分の気に入った空間に、気に入った時間に設けることができる。リミノイドとは、個人が、日常の仕事の間にも勝手に挿入することのできる遊戯性であり、創造性であり、批判性である。インターネットの普及は、デスクの上でも、仕事から遊びへ、遊びから仕事への自由な切り替えを可能にした。現代社会では、仕事と遊びを隔てる境界は多孔的であり、遊びは仕事の領域に不断に侵入してくる。社会学者の井上俊は、焦点を遊びの側に置いて、『「遊びと遊びでないものとの区別」はますますあいまいにあり、遊びと仕事の区別さえ不分明(11)」になった、と分析する。

ツーリズムはリミノイドな行為である。ツーリズムには時間的な制約や空間的な限定がない。財布の中身と暇の程度に応じて、誰でも、好きな時に、好みの行き先を選んで、フライトやホテルの予約を取ることができる。週末にソウルで焼肉を食べることも、数ヶ月を費やして、クルーズ船で世界を一

周することも、思いのままだ。このように考えると、ツーリズムを遠隔地への旅として、他の余暇の利用法や消費の形態から区別する必要はなくなる。今日、私たちは日常の中に非日常の空間を無数に穿つことができる。金曜の夜にしゃれたレストランで食事をして、クラブで踊り明かすことと、十数時間のフライトの後、ミラノでショッピングをして、スカラ座でオペラを観ることの間には、移動する距離の大小があるだけで、質的な違いはない。遊びと余暇のスペクトルを、片方の端には午後のお茶のようにいつでもおこなえるもの、もう片方の端には、フロー体験やシェクナーの言う「ダーク・プレイ<sup>7)</sup>」のように、それなりの準備と覚悟が必要なものを配置してみよう。その間には、買物、ゲーム、食事、セックスなど、さまざまな行為が入るはずだ。もちろん、ツーリズムもその中に入る。また片方の端にコンピューター・ゲームのようなヴァーチャルな体験を、もう片方の端には耐久スポーツなどの身体性に特化した体験を配して、別のスペクトルを想定することもできる。

要は、私たちの暮らすポストモダンな（都市）空間が、リミノイドの遊戯性に満ちた、日常と非日常が織り成す綾のような世界であることだ。アーリによれば、「現代人がほとんどの時間を否応なしに、ツーリストの実践とも呼べることに過ごしている（1995, 150）」。アーリはこうした状態を、「ツーリズムの終焉」と呼ぶが、これは、ツーリズムの消滅を意味するのではなく、ツーリスト的な感覚があまりに身近で、どこにでもあるようになったため、私たちの日常から区別することが困難になった、と解釈できる。だから「ツーリズムはどこにもなく、また、いたるところにある（前掲書、同ページ）」。

儀礼性より遊戯性が優るリミノイドな現代は、リミナリティの終了に続く、日常の秩序への回復を前提としていない。ツアーは弧を描いて出発地へ戻る円環的なものである必要はない。ツーリストは立ち止まったり、さまざまな場所を経由したりしながら、複雑で、迷走的な軌跡を描くこともある。そして、最終的に「ホーム」には帰らないという選択をすることもある。

## 5. おわりに

### (1) 文化の移動

「ホーム」と「アウェイ」、「仕事」と「遊び」を隔てる境界の曖昧化は、ツーリズムとロングステイ、移住や移民との境界も曖昧にしている。日本でも、仕事上の必要から、あるいはライフスタイルの一部として、海外での生活を選択する人が増えた。老後を海外で暮らす人たちが、バリ島に長期滞在し、バリ人と結婚する日本人女性たちの研究も興味深い（山下 2009）。厚生労働省の統計では、日本国内でも、今では16組に1組が国際結婚だという<sup>8)</sup>。明治以来、多くは経済的な理由によって、日本からハワイ、北米、南米、そしてアジア各地へと渡った移民の数は多い。しかし近年では、国際結婚を含め、海外生活を求める理由は多様化し、より流動的な人の流れが生まれている<sup>9)</sup>。海外生活者の増加は、現地と日本の家族や友人たちを結ぶ、ディアスポラ的なコミュニティを育む。こうしたネットワークの拡がりから、親や子供の呼び寄せ、親戚や友人による相互訪問という、新しい移動やツーリズムの形態が生まれ、これらが旅行産業市場に占める規模も拡大している。また、海外での仕事や生活、家族形成や子育てなどは、人の移動を追いかける形での文化の移動、文化間の摩擦や衝突、そして／あるいは混淆をもたらす。

人の移動が、日本から海外へ、あるいは海外から日本へ、という流れに限られるものでももちろんない。人は太古の昔から移動を繰り返し、人の移動に伴って多くの民族や文化が、さまざまな接触を通じて、複雑に変化を遂げてきた。そのような視点から見れば、人類の歴史は、最初からグローバルな移動の歴史だった。しかし、自由市場経済、IT化と大量高速輸送がもたらした、国境を越える資本、物資、情報、技術の移動は、国境を越える人の移動も加速した。ヨーロッパの旧宗主国へと流れるポストコロニアルな人の移動があり、冷戦時代には「壁」の向こう側にあった西ヨーロッパへと向かう人の移動がある。さらに、紛争や抑圧を逃れて移動する難民、国内避難民、亡命者なども決して少なくはない。安全な環境と、安定した、より豊かな生活を求めて移動する人の流れは止むことがない。前述したエスニック・フー

ドのポピュラリティは、非積極的で選択的な移民政策を掲げる日本ですら、移民や出稼ぎ労働者が増加していることを物語る。電車の中で知らない言語を耳にすることも、珍しくなくなった。このような視点において、ツーリストはディアスポラの世界を構成する、移民や労働者と、同じ「移動」の地平に立つ。

ツーリストの行動パターンが、「ホーム」→「アウェイ」→「ホーム」という、出発地(自文化)からデスティネーション(他文化)を經由して帰着地(自文化)に戻る円環的運動だ、という考え方、またツーリズムが文化的・民族的なアイデンティティ確認の行為だという考え方には、自文化・自民族中心的などところがある。デスティネーション(他文化)は、「出かけて行き、おそらくは記念のおみやげか何かを持って帰ってくる場所(Lury, 75)」として捉えられ、それに対置されるものとして、出発地(自文化)が設定されている。ここには、他者という、鏡に映された像によって主体を確認している自己の姿がある。また、文化は、自文化、他文化の双方とも、同質で、固有なもの、場所や民族に根ざした統一体として想定されている。

反対に、「ホーム」と「アウェイ」の境界が曖昧な空間に私たちが生活している、という意識からは、文化を複数形で、流動、変幻するものとして捉えようとする姿勢を導き出せる。アイデンティティの宿る場所として自文化を考えることは、自民族中心的な神話の構築に他ならない。こうした神話が、ツーリストが消費する(旧宗主国/北側から見た旧植民地/南側の)対象を、エキゾチックな他者として生産してきた。そして、こうした文化観への反省から、文化は、居住と移動の緊張的な関係から常に生成し、形を変えていくプロセスにあると理解されるようになった。デスティネーションがパフォーマンスによって構築されるように、文化もまたパフォーマンスによって構築されると考えることができる(Clifford, Gilroyを参照)。

## (2) ツーリストの主体

「リミナルな社会」から「リミノイドな社会」への移行というターナーの分析は、フォードイズムからポスト・フォードイズムへ、産業化からポスト産



業化へ、また、モダンからポストモダンへ、という社会構造の変化を反映している。ツーリズムの文脈では、マス・ツーリズムからポスト・マス・ツーリズムという流れがこれに呼応する。規格化された団体パッケージ・ツアーから個人旅行へ、視覚中心の観光から、体験型のスポーツ、エコ・ツーリズム、ルーラル・ツーリズム、NGOの見学など、ツアーの目的は多様化している。さらに近年では、受け入れ先の社会を搾取しない「リ spons ible・ツーリズム」なども提唱されるようになった。このような新しいツーリズムの形態は、ツーリストに、旅行先のデスティネーションに対して、また旅行する自分自身に対して、省察性を働かせるよう求めることも多い。こうして、「ポスト・ツーリスト」という概念が誕生する。

1986年の著作で、はじめてポスト・ツーリストという単語を使ったマクシーン・ファイファーは、ポスト・ツーリストを、航空機の大型化と共に海外旅行が一般化した1970年代の「ツーリズム爆発」の後に出現した、新しいツーリストのカテゴリーとして捉えている。ファイファーの考えるポスト・ツーリストは、自分がツーリストであるという自意識をもつツーリストである(271)<sup>10)</sup>。ポスト・ツーリストは、旅行をオーセンシティブの探求や、人間としての成長過程だとは考えない。自分が文化の消費者であり、そしてツーリズムが生産するさまざまな記号の消費者であることをわかまえているのだ。

ツーリストは、旅先で自分がアウトサイダーであるという制約から逃れることはできないが、あたかも禅の公案のようなパラドキシカルな方法で、ポスト・ツーリストはアウトサイダーという位置を逆転することができる、とファイファーは主張する。彼女は、古代ローマから現代まで、ツーリズムの変遷を物語風に描き出した著作の最後の章で、ポスト・ツーリストを扱うのだが、描写される時代は現代であり、また、主人公はファイファー自身である。彼女は、ツーリストの行き先としてはあまりにも定番な、エッフェル塔を見物に行く彼女自身を、「ポスト・ツーリスト」として登場させる。夜行列車でパリのリヨン駅に降り立った彼女は、ある市バスの路線がリヨン駅から、エッフェル塔のあるシャン・ド・マルス公園まで延びていることを探し

当てる。興味深い点は、彼女がパリの（メトロではなく）市バスという、ツーリストらしからぬ乗り物を使っていることと、ツーリストとしての自分自身を客体化して描いていることである。左へ右へと曲がりながら、停車と迂回を繰り返し進む市バスの車窓から眺めるパリの市街は、既に何度も見たはずの光景でありながら、はじめて見るように新鮮にファイファーの感覚を刺激する。そしてさらに、パリの市街を眺める自分自身を、あたかも自分の外側に立っているかのように眺めることで、ファイファーというポスト・ツーリストは、パリの街にとって「アウトサイダー」である自分の位置性を、逆転させるまではいなくても、少なくともずらすことには成功している。

ポスト・ツーリストは、ツーリズムの言説により提供される台本を演じるパフォーマーである。しかし彼／彼女は台本を書かれた通りに演じることをしない。彼女／彼は一つの台本を裁断したり、別の台本に接合したり、アドリブを入れたりしたりして、自分に見合うパフォーマンスを創造する。リミノイドな社会に暮らすポスト・ツーリストには、既存の規範を茶化したり、時には上書きしてしまう遊戯性が備わっている。ポスト・ツーリストのは、遊戯的なパフォーマンスの中に立ち上がる。

このような位置性の取り方は、ポスト・ツーリストを、ヴァルター・ベンヤミンがボードレールを下敷きに描く遊歩者（フラヌール）や、ド・セルトーの言う発話行為の主体としての歩行者へと近づける。ベンヤミン自身が、商品を呪物化する資本主義近代に生活していることを自覚しつつ、近代社会を観察した遊歩者であった。遊歩者は、群集の中に隠れ家を求めながら、群衆をヴェールとして、見慣れた都市を幻像化した(346-8)。今日、ポスト・ツーリストは、世界のどこに行っても、都市や、現実の風景の中に混在している。ポスト・ツーリストと遊歩者の姿が二重映しになるのは、ポスト・ツーリストが、旅先の知らない街にあっても、また自分が暮らす見慣れた街にいても、風景を異化する術に長けているからだ。一方、ド・セルトーは、消費者が、消費行為を通じて生産者へと転化すること、つまり、受け身の商品購入ではなく、「支配的な経済体制によって押しつけられたさまざまな製品をどう使いこなすかによっておのれを表わす(14)」ことを説く。支

配体制を言語体系としての「ラング」と考えれば、消費は個人的な発話行為としての「パロール」になる。また、地理を一望監視的に把握可能な都市システムと考えれば、歩行者は、システムに縛られつつも、「なんとかやっけていき(89)」ながら、経路や道順をネゴシエイトし、自らの足跡で地図をパリンプセストのように上書きしていく。歩行は、計画的、観念的な支配に抵抗する身体行為になる。同じ様に、ポスト・ツーリストは、国の観光局やガイドブック、ツアーの旅程や添乗員の指示など、ツーリストを行動の規範に従わせようという戦略に対して完全には絡めとられることなく、行為主体(エージェンシー)としての戦術的な行動によって、自らの発話空間を見つけていく。

最後になるが、コンセプチュアル・アーティストのレナータ・シュティーとフリーダー・シュノックが、ベルリンのヨーロッパ・ユダヤ人犠牲者記念碑(ピーター・アイゼンマン設計で2005年に落成)の第1回コンペ(1995年)に応募した『バス・ストップ』という作品(Stih and Schnock, Till, 180-6)を、ポスト・ツーリスティックなプロジェクトとして紹介したい。過去の残虐行為が、「記念碑」という形によって表象される(ゆえに記念碑という形に押し込められてしまう)ことへの疑問からスタートしたこの作品は、ホロコーストが計画され、実行された場所へ人々を運ぶ、モニュメンタルな記念碑に対するオルタナティブであった。シュティーとシュノックの案ではブランデンブルグ門近くの記念碑建設予定地にシンプルなバス停と、インフォメーション・センターが設置される。バス停からはベルリン市内や近郊、ドイツ国内だけでなく、オランダやポーランド、バルト諸国にもあったホロコーストにまつわる場所へとバスが出発し、インフォメーション・センターは、それぞれの場所について、より詳しい情報を提供する。

バス・ツアーのフォーマットを使ったシュティーとシュノックの提案は、記念碑の固定概念を転覆させる、トリックスター的な遊戯性を備えていた。審査では、応募のあった528案の11位に入り、一般の関心も高かったという。では、二人の案は、実際に運行されている(例えばポーランドのクラクフからアウシュヴィッツへの日帰り)ツアーとどこが違うのだろうか。一つ

は、行き先に、アウシュヴィッツのように名前の知れた場所だけでなく、絶滅収容所へ移送される前に子供たちが暮らしていたユダヤ人孤児院や、ドイツ国内に数多く作られた、移送される人々を貨車に乗せるための集合施設などを含め、今ではそれらの存在が忘れられてしまったような場所が多く含まれていたことが挙げられよう。移動による空間の再認識、歴史の再読が意図されていた、とあってよい。そうした場所に、ドイツの国家的シンボルの一つである道路網アウトバーンを使って、専用のバスで訪ねる体験は、一般のツアーとは違う枠組み（フレーム）を提供し、「複数の空間と時間を同時に移動する身体による、パーソナルな記憶の活動（Till, 182）」を可能にする。乗り物による移動は、運ばれる主体の身体感覚を鋭敏にする。さらに、メモリアル・プロジェクトという文脈が加わることで、参加者は視線の対象となる歴史遺跡を、そして移動中の車窓から見える（おそらくは見慣れた）風景を、過去を反芻しつつ現在を見据える、省察性を伴う知覚で捉え直すのではないだろうか。

シュティーターとシュノックの提案は、ありふれた地勢や光景を前景化し、新鮮な身体感覚で、周囲の環境を意識する、場所の現象学的な受容を目指している。デイヴィッド・クラウチは、ツーリズムを「情緒的で想像力があり、官能的で表現力のある、身体による空間の活性化(207)」と表現する。遊戯性に富んだ観察者であり、また実践者でもある、遊歩者と歩行者、そしてポスト・ツーリストを結ぶ系譜は、よりラディカルな局面で、『スペクタクルの社会』（1967）で消費社会を批判し、シチュアニスト・アンテルナショナルを率いたギー・ドゥボールの「漂流(dérive)」の発想へと繋がる。ドゥボールが提唱した「心理地理学」は、漂流を、「特定の時間の間、自分との関係や、仕事、余暇などにまつわる活動や行為を捨て、地勢に導かれ、導かれた出会いに身を任せること<sup>111</sup>」と定義した。漂流とは、感性と遊戯性によって見慣れた日常の風景を異化し、非日常として取り込むことに他ならない。私は、日常と非日常が鱗状／瓦状に重なり合う、現代の社会が、ツーリストを漂流に誘うものだと確信を強めている。

## 注

- 1) 「あらゆる文化は、植民地支配であれ、仕事のための移住であれ、個人的な旅行、あるいは、マス・ツーリズムであれ、国境を越えた人、モノ、イメージのフローによって作り直される (11)。」ツーリズム研究の文脈では、遠藤英樹が、『『観光社会学』の視点は、[中略]社会学や他の学問領域における諸理論のネットワークの中で、社会のあり方と交差しつつ、社会性・制度性・歴史性を帯びて形成されてくる(34)』と、また大橋健一が、「観光という現象を生み出す背景に存在するより広範な文脈を無視しては観光じたいも論じ得ない(180)」と述べ、ケヴィン・ミーサンは、「ツーリズムは独立した、自己充足的なシステムではなく、人々、資本、イメージ、文化のフローを含むグローバルな商品化と消費のプロセスとして概念化されるべきだ(4-5)」と主張している。このような姿勢は、*Annals of Tourism Research* の編集主幹として長いジャファア・ジャファリによる、ツーリズム研究が「内向的、自己賛美的、自己陶酔的な状況」から脱し、マルチ・ディシプリナリーな研究姿勢を貫くべきだ(2)』との主張とも共鳴する。
- 2) アーリは、1995年の*Consuming Places* (邦訳『場所を消費する(2003)』)、2000年の*Sociology beyond Societies* (邦訳『社会を越える社会学(2006)』)、そして2002年の*The Tourist Gaze 2<sup>nd</sup> edition* では、「ツーリズム(tourism)」から「移動(mobility)」へと焦点をシフトしている。
- 3) 1970年に大阪で開かれた万博で展示された時には、その前年、ニール・アームストロング船長が人類として初めて月面に降り立った記憶が人々にまだ鮮烈であり、月の石を一目見ようとする人たちがアメリカ館の前に長蛇の列をなした。しかし、月の石の展示には、宇宙空間が合州国によって「ニュー・フロンティア」として捉えられ、冷戦体制下でソヴィエト連邦と激しいロケット・ミサイルの技術競争を繰り広げた結果、自国民に対し、自分たちが世界の覇者として「新たなアメリカン・ドリーム」の達成したことをアピールする政治的意図があったことを忘れるべきではない。
- 4) GOはClub Medの発祥の地であるフランス語で、Gentil Organisateur、「親切なオーガナイザー」。
- 5) ツーリズムによるネオ・コロニアルな搾取については、安村(71)を参照。1981年にイギリスから独立したカリブ海の小国アンティグア出身の小説家ジャメイカ・キンケイドの随想、*A Small Place*はこの問題を扱った古典となっている。同じ文脈では、合州国の女性黒人詩人ジューン・ジョーダンが、バハマでの現地(黒人)ホテル従業員との邂逅を描いた"Report from the Bahamas"も興味深い。
- 6) *Tourist Studies* 創刊号(2001)に所収の論文。編者のAdrian FranklinとMike Crangは、創刊号冒頭の論文"The Trouble with Tourism and Travel Theory"で、業界の利潤追求と政府のツーリズム政策に資すること、また実証的なサ

イエンスとしての印象を造型することに専念するあまり、人文社会学的視座からの批判（クリティーク）を欠いていた、それまでのツーリズム研究に反省を迫り、「新しいトランスナショナルな生を構成する重要な要素として（6-7）」ツーリズムを考えるべきだと主張する。

- 7) フローと同じように自己目的的で、危険やスリルを伴うもの (Schechner 119)。
- 8) 厚生労働省「人口動態統計」による、2004年の数字。http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suii04/marr2.html 2010年1月3日アクセス。
- 9) 海外から日本へ、という方向で見ると、バブル期の労働力不足を補うため、日系2世、3世を就労制限のない、「定住者」資格で在留を認めた1990年の入国管理法の改訂は、ブラジルやペルーなど、南米を中心に、日系人移住労働者の流れを引き起こした。短期の「出稼ぎ」で帰国する人も大勢いたが、日本と南米を往復する人、家族を呼び寄せたり、新たな家族を築いたりして、日本を生活の拠点とする人たちも多い。ここにも新しいディアスポラ・コミュニティの成立を見ることができる。
- 10) ファイファーを下敷きに、アーリはポスト・ツーリストの特徴として、1. テレビやビデオがあればツアーに出る必要を感じない、2. 変化に敏感で選択の多様性を歓迎する、3. 自分がツーリストであり、ツーリズムがゲームであることを知っている、を挙げている(1995, 90-2)。
- 11) Debord, G. "Theory of the Dérive" 次の英語サイトより訳出した。Situationist International Online, http://www.cddc.vt.edu/sionline/si/is2.html 2010年1月5日アクセス。なお、フランス語の原文は、http://i-situationniste.blogspot.com/よりアクセスできる。

## 参考文献

- 井上俊 (1995) 「生活のなかの遊び」井上俊、上野千鶴子、大澤真幸、見田宗介、吉見俊哉 (編) 『仕事と遊びの社会学』岩波書店 pp. 1-16.
- 大橋健一 (2008) 「『インドシナ』をめぐる観光文化と観光のまなざしの解説」人の移動と文化変容研究センター (編) 『国際的な人の移動と文化変容』ハーベスト社 pp. 180-192.
- シュクナー、R. (1998) 『パフォーマンス研究』(高橋雄一郎訳) 人文書院.
- 須藤廣、遠藤英樹 (2005) 『観光社会学—ツーリズム研究の冒険的試み』明石書店.
- 高橋雄一郎 (2005) 『身体化する知—パフォーマンス研究』せりか書房
- デュルケム、E. (1975) 『宗教生活の原初形態』(吉野清人訳) 岩波書店.
- ド・セルトー、M. (1987) 『日常実践のポイエティック』(山田登世子訳) 国文社
- ファン・ヘネップ A. (1957) 『通過儀礼』(綾部恒雄、綾部裕子訳) 弘文堂.
- ブーアスティン、D. (1964) 『幻影の時代』(星野郁美訳) 東京創元社.
- ベンヤミン、W. (1995) 「ボードレールあるいはパリの街路」『ベンヤミン・コレ

- クシオン1】(浅井健二郎編訳、久保哲司訳) 筑摩書房。
- 安村克己(2001)『観光—新時代をつくる社会現象』学文社。
- 山下晋司(1999)『バリ 観光人類学のレッスン』東京大学出版会。
- 山下晋司(2009)『観光人類学の挑戦—「新しい地球」の生き方』講談社。
- リーチE.(1974)『人類学再考』(青木保、井上兼行訳) 思索社。
- Butler, J., (1990) *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, New York & London: Routledge [竹村和子訳(1999)『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社]。
- Clifford, J., (1997) *Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century*, Cambridge: Harvard UP [毛利嘉孝ほか訳(2002)『ルーツ—20世紀後期の旅と翻訳』月曜社]。
- Coleman, S., & Crang, M. (2002) Grounded tourists, Travelling Theory, in S. Coleman & M. Crang (Eds.) *Tourism: Between Place and Performance* (pp. 1-20), New York: Berghahn Books.
- Crouch, D., (2002) Surrounded by Place: Embodied Encounters, in S. Coleman & M. Crang (Eds.), *Tourism: Between Place and Performance* (pp. 207-18). New York: Berghahn Books.
- Edensor, T., (2001) Performing tourism, staging tourists: (Re)producing tourist space and practice, *Tourist Studies*, 1 (1), pp. 59-81.
- Feifer, M., (1986) *Tourism in History: From Imperial Rome to the Present*. New York: Stein and Day.
- Franklin, A., (2003) *Tourism: An Introduction*, London: Sage.
- Gilroy, P., (1993) *The Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness*, Cambridge: Harvard UP [上野俊哉、毛利嘉孝、鈴木慎一郎訳(2006)『ブラック・アトランティック—近代性と二重意識』月曜社]。
- Goffman, E., (1990[1959]) *The Presentation of Self in Everyday Life*, London: Penguin Books [石黒毅訳(1974)『行為と演技：日常生活における自己呈示』誠信書房]。
- Graburn, N., (1989) Tourism: The Sacred Journey, in V. Smith (Ed.) *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*, 2nd ed. (pp. 21-36). Philadelphia: U. of Pennsylvania P.
- Jafari, J., (2005) Bridging Out, Nesting Afield: Powering a New Platform, *The Journal of Tourism Studies*, 16 (2), pp.1-5.
- Jordan, J., (2002) Report from the Bahamas in *Some of Did Not Die: New and Selected Essays of June Jordan* (pp. 211-222). New York: Basic Books.
- Kincaid, J., (1988) *A Small Place*. New York: Farrar, Straus & Giroux.
- Kirshenblatt-Gimblett, B., (1998) *Destination Culture: Tourism, Museums, and Heritage*, Berkeley: Uof California P.

- Lury, C., (1997) The Objects of Travel in C. Rojek & J. Urry (Eds.) *Touring Cultures: Transformations of Travel and Theory* (pp.75-95), London & New York: Routledge.
- MacCannell, D., (1973) Staged Authenticity: Arrangements of Social Space in Tourist Settings, *American Journal of Sociology*, 79 (3), 589-603 [遠藤英樹訳 (2001) 「演出されたオーセンティシティー観光状況における社会空間の編成」『奈良県立商科大学研究季報』11(3) pp. 93-107].
- (1976) *The Tourist: A New Theory of the Leisure Class*, Barkley: U of California P.
- (1992) *Empty Meeting Grounds: The Tourist Papers*. London & New York: Routledge.
- Rojek A., & Urry J., (1997) Transformations of Travel and Theory in C. Rojek & J. Urry (Eds.) *Touring Cultures: Transformations of Travel and Theory* (pp.75-95), London & New York: Routledge.
- Schechner, R., (2006) *Performance Studies: An Introduction (2nd ed.)*, New York & London: Routledge.
- Stih, R., & Schnock, F., (n.d.) *Stih & Schnock website*, retrieved January 9, 2009, from <http://stih-schnock.de/>
- Striff, E., (2003) Introduction: Locating Performance Studies in E. Striff (Ed.) *Performance Studies* (pp.1-13), New York: Palgrave MacMillan.
- Till, K., (2005) *The New Berlin: Memory, Politics, Place*, Minneapolis and London: U of Minnesota P.
- Turner, V., (1969) *The Ritual Process*, Ithaca: Cornell UP [富倉光雄訳(1976)『儀礼の過程』思索社].
- (1974) *Dramas, Fields, and Metaphors: Symbolic Action in Human Society*, Ithaca: Cornell UP [梶原景昭訳(1981)『象徴と社会』紀伊国屋書店].
- (1982) *From Ritual to Theatre: The Human Seriousness of Play*, New York: PAJ Publications.
- Urry, J., (1995) *Consuming Places*, London & New York: Routledge [吉原直樹、大澤善信監訳 (2003)『場所を消費する』法政大学出版局].
- (2000) *Sociology beyond Societies: Mobilities for the Twenty-first Century*, London & New York: Routledge [吉原直樹監訳 (2006)『社会を越える社会学』法政大学出版局].
- (2002 [1990]) *The Tourist Gaze (2nd ed.)*, London: Sage [加太宏邦訳 (1995)『観光のまなざし』法政大学出版局].